一葉〝青春〟の挽歌

――〝奇跡の期間〟と『たけくらべ』の位相――

木村真佐幸

一

一葉の代表作の一つに『たけくらべ』をあげることに異論はない。だが、「代表作」の概念規定もさることながら、これにはいくつかの条件ならびに注釈が必要である。

まず第一に、『たけくらべ』は三種類あるという事実である。言うまでもなく最初の作は未定稿『雛鶏』である。これは一葉の「大音寺前」での生活体験が生々しく描かれ、定稿『たけくらべ』よりはるかに写実的であり、リアリティが豊かである。なお、この両者の対比については拙著『一葉文学成立の背景』第七章『雛鶏』と『たけくらべ』の位相＝（昭和51・10＝桜楓社）を参照いただければ幸である。

第二は、明治二十八年（一八九五年）一月から翌二十九年一月まで計七回にわたって「文学界」に分載された『たけくらべ』である。だが、問題は二十八年四月から七月までの間の空白である。もちろん、この間は『たけくらべ』が中断されていたという意味で他の作品が全くなかったわけではない。四月三日、五日には「毎日新聞」に『軒もる月』が、五月五日『ゆく雲』が「太陽」へ――といった具合にいくつかの作品は散見することは事実である。だが、注目される力作というほどのものではない。そして八月三十日刊の「文学界」第三十二号に『たけくらべ』の九章十章が掲載され、これがふたたび十一月まで中断され、以後十二月、二十九年一月となって『たけくらべ』が一応の完結を見る。そして二十九年四月「文芸倶楽部」に一括発表され「めざまし草」の「三人冗語」――すなわち鷗外、露伴、緑雨の絶讃を受けたのは周知の通りである。

ところで問題は先の空白期間の意味と、これらの絶讃に対して一葉は極めて冷ややかに聞き流していること。さらに既に述べたように初掲「文学界」の分載に丸一年以上、正確には十三か月の歳月を費していること。いま一つは「文学界」『たけくらべ』と平行していわゆる一葉後期の〝名作〟〝問題作〟といわれるものが概ねこの間に軌を同じく執筆されていることである。この想像を絶するような二刀流的筆の走りをどう解釈するとよいのであろうか。

二

先にも触れたように、明治二十八年四月から七月までの最初の空白期間には小説『ゆく雲』『軒もる月』等があるが、なんとしても特筆すべきはあの娼婦の世界を素材に、しかも「心中」を結末とした『にごりえ』が書かれていることである。しかも『にごりえ』は「社会の最底辺に短かい生涯を強いられた一人の意固地な、孤独な、不幸な、しかして根の優しい、誇り高い女の物語、そうした女の姿をば暗示の手法によって周到すぎるほど周到に描きつくされた名作」（今井泰子

「『にごりえ』私解」＝日本の近代文学―作家と作品＝吉田精一博士古稀記念論文集＝角川書店、昭和53・11）という斬新説もさることながら、やはり「わからない名作」といった視点が今日支配の傾向と考えてよいと思う。

ところで、この『にごりえ』の対極的評価ならびにその論拠と私見については、いずれ稿を改めて論じることにし、さらにいま一つ、ここで問題視したいことは一葉の数多い未定稿の約半数が『にごりえ』系であり、作品の人物造型も「お力」は終始一貫しつつも、「結城朝之助」に至ってはかなりの紆余曲折があること。また、表題の定稿決定についても同様に苦心の跡が想像されることなど、『にごりえ』が諸々の意味から苦心作、問題作であると言う点である。つづく第二の空白期である。ここでは小説『うつせみ』・随筆『雨の夜』・『月の夜』・『さをのしづく』等があるが、ここでも注目すべきはやはり『十三夜』であり、さらにこの年の十二月二十日、〝妾〟奉公を余儀なくする『わかれ道』が書かれている。また、一方、これは「家という社会的メカニズムがもたらす悲劇を一身に背負った女を初めて造型」し、「妻であり母である女がそうした『性』を抱えて社会的にどう生きるべきかをきわやかに描き出した」（山田有策氏『全集樋口一葉』第二巻の扉裏解説・小学館・昭和54・10）『十三夜』の女主人公「お関」の主体性喪失という一側面から〝人形妻〟的姿勢の反作用的存在とも言える『この子』の執筆もある。だが、一方には「『性』を追求しなければ、トータルな女性像は描出できない」（前掲、山田有策氏）としての『裏紫』も二十九年一月二十日ころまで未完ながら一応、筆をそめている。つまり、これらの問題作がすべて『たけくらべ』と軌を同じくして書かれている事実は看過できないはずである。視点を換えて言うならば、一葉は、一方では詩的で抒情性豊かな『たけくらべ』に専念し、片や暗くどろどろとしたゾライズムをまさしく地でいくような『にごりえ』を中心とする大胆な作品を次々と描出する。ついでに触れると一葉はその余波をかって母と娘のすさびとも言える「性」と「遺伝」の問題の『われから』を経、さらに『ひるがほ』等々数編の無題作の成稿をみないまま明治二十九年十一月二十三日、数えて二十五歳の生涯を閉じる。では、一葉はなぜこのような〝変身〟とも言える平行執筆を行ったのか――。

三

ところで先の疑問に答える前に、いま一つ問題がある。それは一葉の小説二十二編の系譜の上のおける『たけくらべ』の位置である。この点については松坂俊夫氏[1]が既に一つの卓見を述べているので、いまその説に敷衍して考えてみると、『たけくらべ』以前の作品の主人公は美しい独身の女性であり、かつては相応の身分と環境にあったものが今は零落して孤児となり、そこには親娘二代にまたがる運命悲劇が主題である。これに反し、『たけくらべ』以降の主人公は人妻にかわり、系累も親娘そしてその子と三代にまつわり、しかも現実生活の中から種々の苦悩を生む性格悲劇が中心で、これに異性問題が複雑に絡んで一段と作品の密度を高め、リアリスティックになっているのがその特徴の一つである。では『たけくらべ』はどうか――。色々な解釈が考えられるが、一応の帰結としては『たけくらべ』はどちらにも属さない〝特異〟な存在……とも言えるのではなかろうか。ここに一例を示すと『たけくらべ』の主人公を一人に限定するとそれは一体誰なのか。私はためらいなく言わせてもらえばそれは「藤本信如[2]」といいたい。とは言うものの「信如」の作品の頻度数は少ないし顕在化も決して多くはない。だが、第一章の末尾においてフルネームで紹介され、これがまた終章の「水仙の造花」の贈り主にも伏線的効果として生かされている。また、「信如」は既に述べたように表面には目立った存

在としては描かれないが、「美登利」は言うに及ばず、「正太郎」、「長吉」、「三五郎」においても「信如」の一挙手一投足、一言半句によって彼等の意識や行動が左右されている。これは「信如」がことさら意識的にリモコンしているわけではないだけに作品の陰影を豊かにし読者をしてこれら登場人物の心理行動の起伏に誘なう効果を高くしている。では、仮に一葉の他の作品に準じて「美登利」を主人公としてみよう。「美登利」は一応は両親健在で、「生国は紀州、言葉のいささか訛れるも可愛く」云々とあり、少なくとも現時点では「零落」とは言えない。たしかに「美登利」の行末は遊女に……と予想はできる。だが、これも運命悲劇の将来性であって現実の葛藤とは断定しにくい。以上、狭義の視点からの論証でしか過ぎないが『たけくらべ』の位置が前記の一連の系譜の上になじまない。では、この理由は何か――。

四

まず第一点として和田芳恵氏が説くいわゆる〝奇跡の十四か月〟――この期間こそ一葉が「死」の影像を前にして渾身の力をふるい、人生の真実、社会の矛盾と真正面に立ち向い、大胆にして鋭く文字通り〝捨て身〟の戦法で身をそぎ、骨を削っての〝死闘〟の連続であったのではなかろうか。長兄「泉太郎」の結核による死への軌跡は　不幸にして一葉自身が避けられぬ死出の旅路に他ならない。そして明治二十七年七月一日の従兄「幸作」の死もこれに拍車をかける。一葉がこの死という魔手の存在に気づいて「我身の宿世もそぞろにかなし。」(27・7・1の日記)と記し、つづく翌二日の「骨あげ」の日に「こも、のがれぬ宿縁なるべきにや。」として愕然となるのも当然の帰結と言わざるを得ないはずである。

以上のような否定しようにも払拭し得ない重圧……これらの延長線上に久佐賀問題を載せて考えなければならない。したがって、いわゆる「久佐賀問題」のみを切り離しての一葉論は片手落ちである。この「死」という重大事実が一葉をして〝精神的娼婦〟たらしめたのであり　時には久佐賀から〝体〟交換条件での経済援助に一応は憤怒しつつも〝伏せ字〟の返事を出したり、二十七年の十二月に「千円」――今日の「一千万円」の破額の借金の申し入れと、久佐賀の先の要求にあたかも応じるかの返章という危険な綱渡りも自ずと合点がいくというものである。

周知の通り一葉は、明治二十九年一月六日の日記に、大阪の上野山仁一郎なる一葉崇拝者の一人が、一葉への経済協力を申し出た事実と、一方、西村釧之助、同じく弟の小三郎を介して府下の豪商「杏何がし」がこれまた「おのが名をかくして」と、一葉に心の負担をかけさせない配慮してのスポンサーが次々と現われたことが記録されている。後者に対して「さらば老親に一日の孝をも」として「一月の末二十金をもらひぬ」とあるが、他はすべてこれらを強力に辞退している。では経済的に好転かというと実態は従来と少しも変わらない。明治二十八年の秋ごろと推定できる日記にも、「秋のはじめさまざのこと多く、されど一銭の入金もなく、せんかたつきて(抹消)をたのまんと恥をしのびてゆきたるなれど、なにのかひとてなかりし、たゞたゞ、これは生涯の恥なりし。」とあることが一葉の経済事情の困窮さを如実に物語っている。しかもついでに触れると、この借金の相手は記録することにさえためらわざるを得ない人ということになり、さしずめ「桃水」ということになろうか――。もし、そうだとするならば桃水の例の「鶴田たみ子」問題に対しても一葉は誤解のままであり、この種の問題は一葉の胸中深く「愛憎」となって沈潜しているはずである。その点から考えても一葉にとってこの「桃水」への借金申し入れは身を切られる思いであったに相違ない。しかし、その苦衷を百も承知でなおかつ「桃水」へというこの事実は一葉の経済はまさしく八

方塞がり、逼迫の極を裏付けるのに充分である。その上、結果は不首尾……となれば一葉は身の置き場がなかったに相違ない。かくして二十八年十月の日記に、「やう〳〵世に名をしられ初めて、めづらし気にかしましうもてはやさるゝ。うれしなどいはんはいかにぞや。これも唯、めの前のけぶりなるべく、きのふの我れと何事のちがひあらん。（中略）今の我みの、かゝる名得つるが如く、やがて秋かぜたゝんほどは、たちまち野末にみかへるものなかるべき運命、あやしうも心ぼそうもある事かな…。」と、世上かしましき文名と経済生活の余りの距離に思わず自棄的虚無感にも似た心情を吐露せざるを得なかった。

また、明治二十九年一月六日の日記にも、「こぞの秋、かり初に物しうるにごりえのうわさ、世にかしましうもてはやされて、かつは汗あゆるまでの評論などかしましき事よ。十三夜もめづらしげにいひさわぎて、女流中ならぶ物なしなど、あやしき月旦の聞えわたれる、こゝろぐるしくも有るかな。（中略）友のねたみ、師のいきどほり、にくしみ、恨みなどの、限りなく出来つる、いとあさましう情なくも有るかな。虚名は一時にして消ゆべし。一たび人のこゝろに抱かれたるうらみの、行水の如く流れさらんか、そもはかりがたし。」と、ここでも名声と現実感のギャップ、師をはじめ一葉の友人、そしてその周辺の人々の思惑に心を痛め、かつ慨嘆する一葉の姿が余すところなく記され、ついに一葉は「われはいちじるしく、うき世の波といふものを見そめぬ。しかもこれにのりたるをいかにして引きもどさるべき。あさましのさま少しかゝばや。」と世の矛盾、現実社会の不合理、人の世の業をいやと言うほど体験せざるを得なかった。そして同年五月二日の日記に、「今文だんの神よといふ鷗外が言葉として、われはたとへ世の人に一葉崇拝のあざけりを受けんまでも、此人にまことの詩人といふ名を送る事を惜しまざるべしといひ、作中の文字五六字づゝ、今の世の評家作家に伎倆上達の霊符として呑ませたきもの…」云々と書きつつも、「此評よ、いたる所の新聞雑誌にかしましうもてさわがれぬ。日本新聞などには、たゞ一行よみては驚き歎じ、二行よみては打うめきぬとかありける」世評に、「そは槿花一日の栄えを歎けばなるべし」と冷たくつっぱねている。

以上、周知のことをことさら長々と引用したのは、『にごりえ』・『十三夜』そして『たけくらべ』再掲載の折の好評絶讃に対しても、依然として冷ややかな受けとめ方をしている事実を再確認したかったからに他ならない。その理由は一体何か――。世に、一葉「すね者」説がある。だが、「すね者」説もさることながら、『十三夜』が飛ぶように売れても原稿作成の一葉には何らのリァリティがない、つまり一葉の経済生活は一向に好転しないし、既に引用したように師や友をはじめ周辺の人々の「ねたみ」さえこれに付加される。「名声」とはかくも虚しく現実性稀薄のものであったのか……。一葉の胸中は複雑に揺れ動き、〝名声〟なる世評は虚無の雑音と化して一葉の耳目にいやおうなしに突ぎささってくる。加えてあと一か月後、日記の筆すら持てなくなった一葉は、己れの命運が時々刻々迫ってくるのを凝視せざるを得なかった。先に触れた経済援助の上野山仁一郎、桑某等らの意志をさりげなく否定したのも、結局は「死」の影を意識した一葉が、それらの期待に応え得ない己れ、いってみれば〝汚名〟のみ残るを潔ぎよしとしなかった一葉の意地とプライド……さらに〝旗木直参〟という〝士族〟意識――これらの精神風土が陰に陽にこれらを醸成していたのではなかろうか。

五

以上のように一葉の〝晩年〟は努力によっても解消し得ない不協和音の渦中に息も絶え絶えであった。既に触れた半井桃水への誤解と偏

見、愛と憎……。そして久佐賀義孝をめぐる心の汚点と払拭し得ぬ汚辱の一コマ。祖父、父、長兄が志しを半ばにして挫折せざるを得なかった怨念の数々、はたまた事の事実は必ずしも客観性は少なかったにせよ〝許嫁者〟渋谷三郎の婚約破棄からくる男性不信感……。その諸々の要因は「死」と対峙しつつ渾身の力をふりしぼって生きつづける一葉にとって余りにも苛酷というより他に形容しきれないものであった。したがって以上のような状況の中でしかも断崖絶壁に立つことを余儀なくした一葉が、ふと己れの生涯を顧みる時、いつも心の支えとなって消し難い〝愛憎〟と苦悶の対象……すなわち小説の師であり、かつ〝恋人〟的存在であった半井桃水その人であったはずである。桃水は一葉が「鶴田たみ子」問題に対し、かくも胸中深く誤解を定着していることを知る由もなかった。桃水は真から一葉へのよき理解者であった。一葉が小説家としてすでに己れを乗り越えたことを承知しつつも、一葉の〝成功〟を心から喜び、わが身の生活の不如意をかえりみず、物心両面の援助を怠らなかった。これは一葉の短かい生涯の中、唯一の支えであり、心の灯であったといっても過言ではない。

かくして『たけくらべ』は、先の未定稿『雛鶏』を敷衍して、ここに尽きぬ桃水への恋の苦悶と己れの〝青春〟に対する惜春の賦(3)……換言するならば「死」を意識し、他の暗い作品を必死になって描出する心の句読点と自己救済の場、これこそ『たけくらべ』そのものではなかったか。最初に問題提起した他の作品の同時執筆の一要因を以上のような状況と経緯から到達した一応の仮説である。

一葉の生涯はある意味では不幸の連続とも言える。だが、しあわせであることと、しあわせとみられることとは違う。後者は他者との対比においてなされるだけに不満は永久に解消しない。一葉が明治のこの時期において〝女流作家〟を志向し、しかもこれをみごと体現したことは驚異的である。したがって一葉の短かい生涯の中で、たとえ一葉の一方的誤解が原因で桃水への愛が憎しみに変わろうとも、心に秘めた桃水への思いが〝女流作家〟「樋口一葉」を形成した一要因であったとするならば、それはある意味では一葉にとって一つの救いであり、また一葉という一個の人間の〝生ざま〟を立体的かつ、振幅の多い動的なものに結果したというのは余りにも極論と言うべきであろうか――。

注（1）「樋口一葉研究」（昭和45・9＝教育出版センター）

（2）「信如」の人物造型の一要因となったと目される「大音寺」の息「加藤正道」について、現住職（高瀬清光氏）は次のように話していた。（昭和57・6・4）

当時、この界隈は、ほとんど大音寺の地所であり、「大音寺」自ら銭湯三軒も経営、そのために経済力も豊かで『たけくらべ』の第九章よろしく、和尚は酒と女と…といった日常性であったらしい。収入も莫大であったため、金を石油缶に入れて本堂の縁側下に埋めておいた。気がついた時は緑青が出てつかいものにならなかったとのこと。正道もこの経済力を背景に高価な着物に加え、当時、学生の身でありながら高級人力車で「芝中」（現在の「芝高校」）で、浄土宗立の学校）に通っていた。これら理財家「大音寺」、そして加藤正道が一葉の目に特異に映ったと考えられる。その後、近くの人の妬みをかい、放火？という憂き目に遇った――というのが現住職の談である。

以上の点を上島金太郎氏の「大音寺前考証」（八）、国文学、昭和33・6＝後に『樋口一葉とその周辺　大音寺前考証』（昭和44・11刊）によれば「大音寺」の敷地三千坪、さらに浅草より千住方面、上野から千住方面への分岐点として目標になりやすかったこと。いま一つは〝吉原〟在住の〝美化〟あるいは「かくれみの」の一つとして〝大音寺前〟の呼称が成立したのではないかのみ方とある意味で符合して興味がある。

（3）山田有策氏が「全集樋口一葉」第二巻『たけくらべ』の扉裏の解説「鑑賞」の中で、「一葉の視線は近代社会から取り残されていく遊廓吉原

に注がれる。そこには出世間の欲望とは無縁なる子供たちが、夏祭をめぐって無邪気ともいえる遊びと争いをくりひろげている。しかし、この子供たちの世界も大鳥神社の酉の市をさかいに急速に崩壊していく。子供たちの明るくシンプルな時間が終り、彼の前には大人の時間が痛苦な生をのぞかせたちふさがるのである。こうした子供たちの透明な世界とその消滅を描きつつ、一葉は一足とびに大人にならざるを得なかった己れの生をふりかえっていたに相違ない。とすれば『たけくらべ』は一葉にとって、己れの青春の不在への鎮魂歌でもあったのだろうか。そして、それが近代社会の制度から切りすてられていく時間や空間に対する哀惜の形で描かれている点に、ひとり一葉だけにとどまらない理由があるに相違ない。現在に住む私たちもまた『青春』を失ってしまっているからである。」と、この短文の中に卓見が圧縮されて啓発されるところが多い。

※　私は、昭和五十六年度「学校法人札幌大学研究助成」により、新資料の探査発見に基づいて「一葉論」――特に「後期一葉文学の原点――その『死』の影と『久佐賀問題』の意味するもの―」を中心に原稿の整理に当ってきた。ところが図らずも今年二月二十日、恩師五十嵐三郎教授が忽然とこの世を去られた。まさしく心の中に空洞の生ずる思いである。この度、「五十嵐三郎教授」追悼号とのことで、急拠、右の論文の一部をここに霊前に捧げることとした。このようなまとまりのない感想文的なものを捧げることをお詫び申し上げると共に、先生の学恩に心から感謝し、ここに謹しんで先生の御冥福をお祈りする次第である。